平成１６年度　校内共同研究計画

仙台市立黒松小学校

１．研究テーマ

「確かな学力を身につけさせるための指導法の改善」
～少人数・習熟度別指導，教科担任制指導を通して～

２．主題設定の理由

（１）本校の教育目標から

創造的な知性，豊かな情操，健康な体，を養い，生きる力を備えた児童を育成する

子供を大切に

(1)それぞれの良さを生かす
- 算数の習熟度グループや少人数指導，教科担任制の活用
- スキルタイム（国語・算数）の充実
- 学習支援ボランティアの活用

(2)総合的な学習の時間の充実
- 自ら学び，自ら考える力の育成と学び方や調べ方を身につけさせる。（７０時間）
- 全学年で情報教育（３５時間）
- 国際理解教育（英語に親しむ）

学舎を大切に

(1)美しさ，豊かさに気づく心と目を育てる
- 道徳教育，特別活動などの充実
- 生活指導，清掃指導の徹底

(2)安全できれいな学習環境づくり
- 教材教具の充実
- 施設設備の整備

保護者・地域を大切に

(1)より開かれた学校に
- 学校評議員会
- 学校運営委員会へのPTA 役員の参加
- 地域，保護者向けに学校要覧を作成・配布
- 年間指導計画を PTA 室で閲覧

(2)地域活動への積極参加
- 学校施設の開放
- 地域行事への協力など

学力保証：基礎・基本の確実な習得

＜教育課程編成上の重点事項＞

◎「基礎力（読み・書き・計算）」の確実な習得

① 計算力の向上（１００ます計算，計算ドリル）
② 読み書きの習熟を図る（漢字・音読・スピーチ，プリント）
③ 基礎力育成に必要な教科のスキル
④ **個に応じた授業の推進（授業改善）** ⇒ **１６年度 校内研究のめざす方向**
- 算数少人数・習熟度別指導の充実
- 教科担任制による指導
- 個別指導，教育相談の充実
- 外部講師（学習支援ボランティア）の活用
- 教師の指導改善や評価方法の工夫

（２）　児童の実態から

【算数に対する児童のアンケート調査】　（資料１参照）

○「むずかしい問題でもあきらめないで解く」「自分の考えと比べながら，友達の考えを聞く」「まわりに流されず自分のペースで勉強を進める」等に関して，全体的にプラスに変容してきている。

○学習用具の忘れ物について「いつも気をつけている」と答えた児童の割合が大きく伸びた。

○１・２年の少人数指導では，「グループに分かれて勉強することが楽しい」「自分のクラス以外の先生や友達と勉強することが楽しい」と感じている児童が多い。

○３年生以上の習熟度別グループ指導では，「自分の力を伸ばすの良い方法だ」９０％，「だれとでも抵抗なく学習できる」９２％と答えており，本校の算数システムが児童にしっかりと定着してきたことが伺える。

○「算数の力がついてきた」と感じている児童が７０％に上る。

○教師の指導に関しては，「わかるまでていねいに教えてくれる」「ヒントや資料，道具などを用いてわかりやすく説明してくれる」と答えている児童の割合が多い。また昨年に比べ，「授業中，自分の考えを発表する場がある」と答えた子の割合も増えてきている。

▼発表については，低学年が積極的であるのに対し，学年が上がるにつれ消極的な傾向が見られる。

▼「予習や復習をする」「家庭学習の時間を決めて取り組む」では「いつもそうしている」と答えている児童が増えている反面，「あまりしていない」「全然していない」と答えている子の割合も増加の傾向にある。家庭との連携の在り方に課題が残った。

▼低学年では，ごく少数だがグループ指導に不安を抱いている児童もいる。事前の十分な説明や細かな配慮をしていく必要があると思われる。

（３）１５年度の研究課題から

○各グループの実態に応じた，よりきめ細かな指導の工夫が必要である。

○教師の指導技術，専門性をより一層高める必要がある。

○グループの実態に応じた独自の指導計画を作成する必要がある。

○「学習チェックカード」の有効活用と個に応じた，個を生かす評価の工夫が必要である。

○基礎・基本を確実に身につけさせるための，スキル学習のより有効な手立ての確立，及び全体計画の見直しが必要である。

○教科担任制による指導効果，学力向上の具体的な検証をする必要がある。

○家庭との連携を強め，児童の学習習慣の育成を深める必要がある

以上のような「本校の教育目標」「児童の実態」「これまでの研究課題」から，１６年度は児童に「より確かな学力」を身につけさせるための指導法の改善に取り組みたいと考え本主題を設定した。

特に本校ではこれまでの研究を通し，学校全体としての指導体制やシステムはほぼ確立されており，今年度は授業そのものに視点をあて，教師の指導の工夫によって「個に応じたきめ細かな授業づくり」を推進していきたいと考えている。

授業の質的な改善・指導の工夫

・子ども一人一人の力を伸ばす授業　⇨　個に応じたきめ細かな指導の工夫
・子どもにとって魅力ある授業　⇨　子どもの興味・関心を持続させる授業づくり
・教師の専門性，得意分野を生かした授業　⇨　教師の指導技術の向上

３．研究目標

算数の少人数，習熟度別指導や教科担任による学習を通して授業の質的改善を図り，基礎・基本の定着と学習意欲を高めるための指導法を追求する。

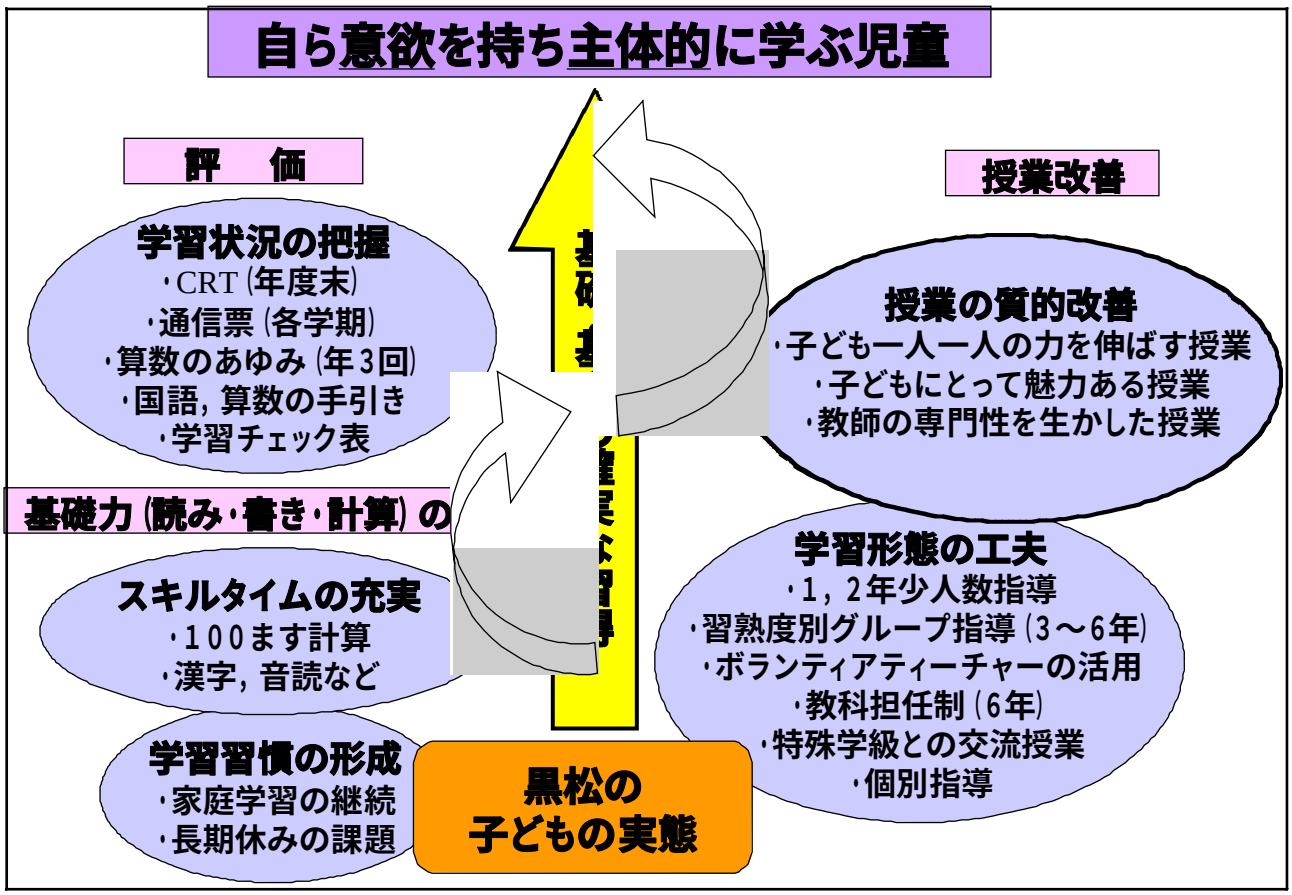
１６年度は以下の点を重点目標として，研究を推進していく。

○個に応じたよりきめ細かな指導方法の確立
○各グループの到達目標に応じた具体的な指導の手立て
○グループの実態に応じた独自の指導計画の作成
○個に応じた，個を生かすための評価の工夫
○スキル学習の有効な手立ての検証と全体計画作成
○教科担任制による指導効果，学力向上の検証

４．研究仮説

児童一人一人の学習の習得状況を的確に捉え，個に応じたきめ細かな指導を工夫していけば，児童は確かな学力を身につけ，成就感や満足感を味わい主体的に学習に取り組むであろう。

５．研究の進め方



６．黒松算数指導システム　（例：平成１５年度）

黒松小学校　算数指導システム（平成15年度）

＜少人数指導＞

１学年（担任＋加配1名）
○TT指導（４月～９月）
○クラス等質２グループ指導　（10月～３月）

２学年（担任＋加配1名）
○クラス2分割グループ指導（４月～１２月）
○習熟度別グループ指導（１月～３月）

＜習熟度別指導＞

３～６学年（担任＋専任2名）
○習熟度別グループ指導（通年）

７．黒松小学校教科担任制システム　（例：平成１５年度）

指導教科・週指導時数

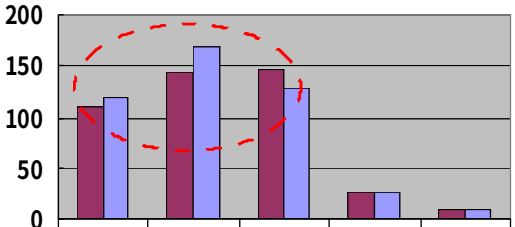
教師	国語	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	総合	道徳	学活	週指導時数
6の1担任	—	—	5	—	6	—	6	—	3	1	1	22.0
6の2担任	11	—	5	—	—	—	—	2.5	3	1	1	23.5
6の3担任	—	10	5	—	—	—	—	2.5	3	1	1	22.5
6の4担任	11	—	5	—	—	—	—	2.5	3	1	1	23.5
教務主任	—	—	—	—	—	6	—	2.5	—	—	—	8.5
研究主任	—	—	—	10	—	—	—	—	—	—	—	10.0
算数専任	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	5
算数専任	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	5

■学担としてクラスで指導　■教科担任として指導　■グループ担当として指導

資料（1）学習意欲に関する児童アンケート調査

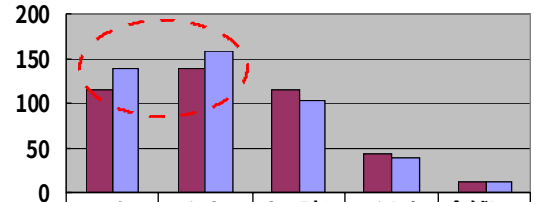
【プラスに変容している点】

むずかしい問題でもあきらめないで解く（3～6年）



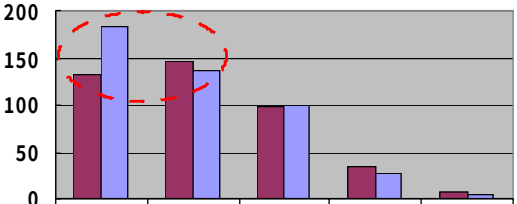
	いつもそ	そうする	する時と	そうしな	全然して
14年度	110	143	145	28	9
15年度	119	168	129	27	8

まわりに流されず自分のペースで勉強を進める（3～6年）



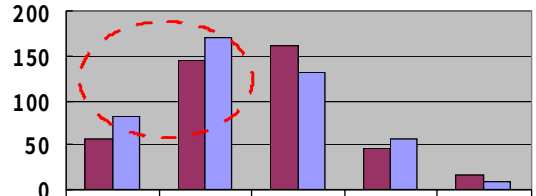
	いつもそ	そうする	する時と	そうしな	全然して
14年度	114	140	114	43	11
15年度	140	158	102	38	11

学習用具を忘れないようにする（3～6年）



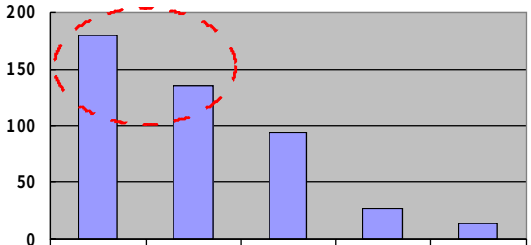
	いつもそうしてい	そうすることが多	する時としない時	そうしないときが	全然していない
14年度	132	146	98	34	7
15年度	183	136	99	28	5

先生や友達の話をしっかり聞きまじめな態度で学習する（3～6年）



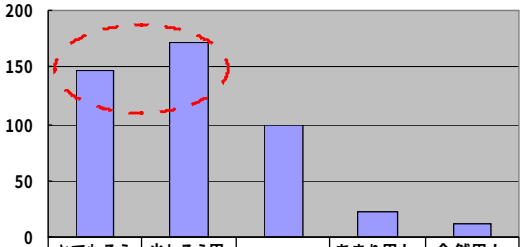
	いつもそ	そうする	する時と	そうしな	全然して
14年度	58	144	161	45	16
15年度	83	170	131	57	10

グループに分かれての勉強は分かりやすい，自分の力を伸ばすのによい方法だ（3～6年）



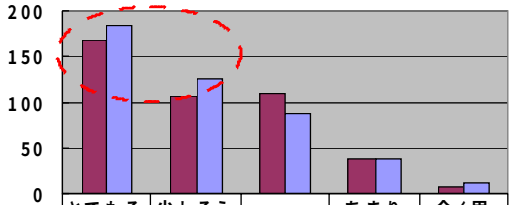
	とてもそう思う	少しそう思う	ふつう	あまり思わない	全然思わない
15年度	180	135	93	28	15

自分は算数の力がついてきたと思う（3～6年）



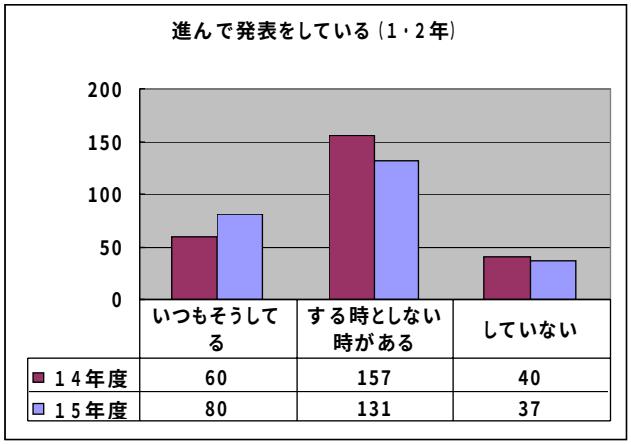
	とてもそう思う	少しそう思う	ふつう	あまり思わない	全然思わない
15年度	147	171	100	22	11

わかるまで、ていねいに教えてくれる（3～6年）

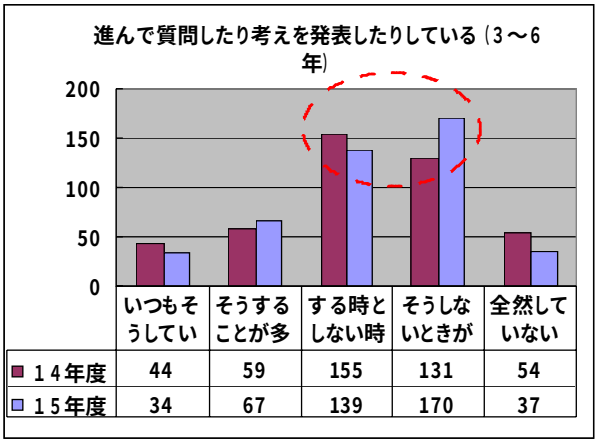


	とてもそう思う	少しそう思う	ふつう	あまり思わな	全く思わない
14年度	168	107	110	39	8
15年度	185	126	88	39	11

【課題と考えられる点】

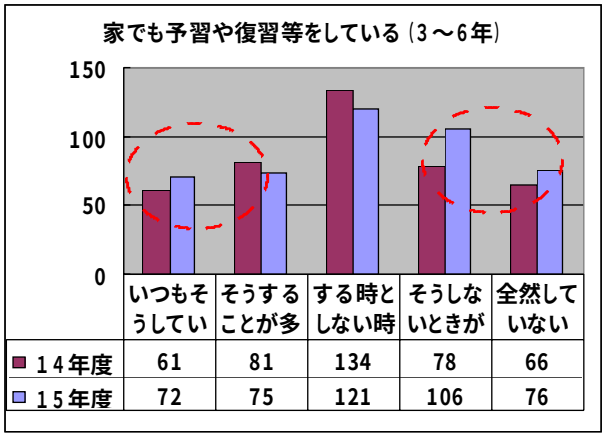


	いつもそうしてる	する時としない時がある	していない
14年度	60	157	40
15年度	80	131	37

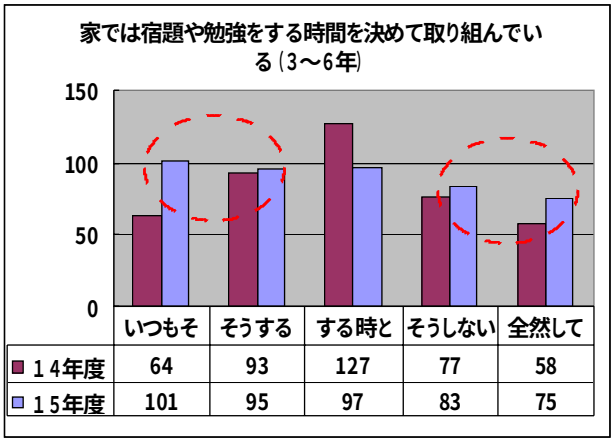


	いつもそうしてい	そうすることが多	する時としない時	そうしないときが	全然していない
14年度	44	59	155	131	54
15年度	34	67	139	170	37

発表に関しては，低学年が積極的であるのに対し，学年が上がるにつれて消極的な傾向見られる。



	いつもそうしてい	そうすることが多	する時としない時	そうしないときが	全然していない
14年度	61	81	134	78	66
15年度	72	75	121	106	76



	いつもそ	そうする	する時と	そうしない	全然して
14年度	64	93	127	77	58
15年度	101	95	97	83	75

「いつもそうしている」「そうすることが多い」と答えている児童の割合が増えているが，一方で「そうしない時が多い」「全然していない」と答える児童も増加の傾向にある。
家庭との連携をより強化していく必要があると考えられる。